

高校と社会をつなげることで、自ら学びに向かう生徒育てる。

「なぜ数学を学ぶ必要があるのか」をずっと考えているという東濱先生。
学校と社会をつなげる活動にもかかわらず、自ら発信できる人材育成に力を入れています。

「生徒にはよく、わからないことはわからない
と言えるようになろう。わからないことはでき
る子に聞こうと言っています。できる子に先
生になってもらうことで、教室全体が互いに
教え合う場という雰囲気になっていくのが
いいですね」という東濱先生。授業はプ
リントを多数使って展開、問題を解いては
提出してもらい添削する。各自の進捗状況
は貼り出し、わからない生徒ができる生徒に
質問しやすい環境をつくっている。

数学を勉強して将来何に役立つのか？
と生徒に聞かれる。「大学卒業後、教師に
なるまでの7年間、民間企業などで働いて
いたのですが、実際、まったく数学は使わな
かった」。ただ、わからないことを人に聞く、そ
してもう1回やり直してみる、今度は自分が
教える立場になるということが人間としての
基礎体力につながっていくのではないかと。そ
う東濱先生は考え、毎日夜8時まで教室を
解放し、「互いに学び合う場」としている。

とはいえ、何とか社会で数学がどう役に
立っているかも伝えたいと考えていた東濱
先生。そんな矢先出会った『とんでもなく役
に立つ数学』という本。すぐに著書に講演

を依頼したそうだ。「リアルな話を聞き、数学
を身近に感じた生徒たちも多くなりました」。

勉強には動機づけが大事と考え 学びへ導く工夫を実践

社会と結びつけることが、生徒にやる気
を促すことができたと確信した東濱先生は、
「この人だ!」と思ったらすぐに連絡を取る。
「勉強したいと思う気持ちは自分が学びた
いことを見つけた瞬間に湧き上がる。だから
こそ、自ら学びに向かえるよう、生徒にさま
ざまな機会を提供したいんです」。

また、生徒のやる気に火をつけるため、学
年トップの生徒に勉強方法をみんなの前で
話してもらったこともある。「それによって何
人かが負けるものかと頑張り始め、お互い
に切磋琢磨する環境ができました」。

コツコツ積み重ねて勉強できる生徒を一
人でも多く増やしていきたい。それが自信とな
って、自ら発信できる人になってくれたら。「ま
だ教師になって4年目で未熟だけれど、数学
教師の自分にできる限りのことをしたいと思
いながら、日々生徒と向き合っています」。

イケてる若手
センセイ!!
vol.8



沖縄・私立興南高校
ありはま
東濱克紀先生 (34歳)

沖縄県立首里高校、東京理科大学理学部卒。一
般企業などを経てNPO 沖縄学力向上の会を設立。
09年より興南中学校で非常勤講師として「よのな
か科」の授業を担当。学校と地域をつなげる教育の
実践で13年、第62回読売教育賞受賞。10年より
現職。ディベート部の顧問も務める。



東濱先生が以前、興南中学の生徒に行っていた「よ
のなか科」の授業風景。社会に対して生徒が意見を
言う機会を設けたり、生徒がさまざまな職業人にイン
タビューしたり。その内容は「15歳へのトク」(ポー
ダーインク)という1冊の本にまとめて出版した。

fan message



東濱先生は「沖縄の教育を変えよう、社会に役立つ力を持つ生徒を育て
よう」という熱い気持ちを持っています。「僕ら教師が社会を知ることが、生
徒の視野を広げることになる」と考えています。誠実で生徒からの信頼も
厚い先生です。(興南中学校社会科・よのなか科教諭 門林良和先生)